末永数蔵町遺跡

－ 主要地方道福岡早良・大野城線道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書 －

前原市文化財調査報告書

第97集

2008

前原市教育委員会

末永数蔵町全体写真（鳥瞰写真）

巻頭図版２－１

全体写真（真上）

巻頭図版２－２

宇治神社　絵馬

序

本書は県道の道路拡幅工事に先立って行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

末永数殿町遺跡を含む怡土東部は、古代「伊都国」の王都である三雲・井原遺跡を始め、遺跡の宝庫として知られています。今回の調査でも、掘立柱建物や布掘り基礎建物、便槽などが検出され、その内部から陶磁器など多くの遺物が出土し、江戸時代から明治にかけての末永村の様子を伺い知ることができる貴重な成果をあげることができました。

埋蔵文化財は、地域の歴史を知る上で欠かすことのできない文化遺産です。本書に収録されたこれらの資料が文化財の認識と理解のため、また教育、学術研究の分野においても、役立つことを願うものであります。

なお、末筆となりましたが発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました周辺住民の方々、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご協力いただきました関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月31日

前原市教育委員会
教育長　中　原　一　憲

例　言

1．本書は主要地方道福岡早良大野城線の道路拡幅工事に伴い、平成18年度に前原市教育委員会が行った発掘調査の記録である。
2．末永数蔵町遺跡は、前原市大字末永に所在し、約５５３㎡にわたって遺構を確認、発掘調査を行った。
3．遺構の実測にあたっては、福田博右、平野隆之の協力を得、江崎靖隆が行った。
4．遺構の写真は空中写真を九州航空に委託し、その他は江崎が撮影した。
5．遺物の復元は、藤森啓子、和多治子、柏田睦子、三嶋弘美、波多江聡美、名取さつきが行った。
6．遺物の実測・製図にあたっては、江崎の他に、田中裕美、加藤優香、田中阿早緑、藤野さゆりの諸氏に多大なる協力を得た。
7．遺物の写真は江崎が行った。
8．本書に掲載した遺構及び全体図で使用した座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅱ系に準拠したが、世界測地系ではなく、日本測地系を使用している。また、方位は磁北であり、水平基準は東京湾平均海水面水準（T．P．）である。
9．遺物・実測図・写真は伊都国歴史博物館にて管理・保管している。
10．本書の執筆、編集は江崎が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経緯……1
　2．調査の組織……1
　3．調査の工程……2
Ⅱ．位置と環境……3
Ⅲ．調査の記録……6
　1．調査の概要……6
　（1）調査の概要……6
　（2）基本層序……6
　2．遺構と遺物……7
　（1）石垣状遺構……7
　（2）布掘り基礎建物……8
　（3）掘立柱建物と関連施設……10
　（4）焼土坑……14
　（5）埋甕……15
　（6）溝……16
　（7）土坑……17
　（8）ピット……20
　（9）鉄器と石器……21
Ⅳ．まとめ……22
　1．検出した遺構・遺物について……22
　2．宇治神社の絵馬……22
　3．出土した貧乏徳利について……23

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1/75,000）……4
第2図　末永数蔵町遺跡周辺地形図(1/5,000)
……5
第3図　東壁土層断面実測図（1／60）……6
第4図　石垣状遺構平断面実測図（1／40）
……7
第5図　石垣状遺構出土遺物実測図（1／3）
……8
第6図　布掘り基礎建物平断面実測図
（1／60）……9
第7図　布掘り基礎建物出土遺物実測図
（1／3）……9
第8図　1号埋甕実測図（1／6）……10
第9図　1号掘立柱建物・1号埋甕平断面実測図
（1／40・1/20）……11
第10図　2号掘立柱建物平断面実測図
（1／80）……12
第11図　3号掘立柱建物・5号土坑平断面実測
図（1／40、1／20）……13
第12図　5号土坑出土遺物実測図（1／3）…13
第13図　焼土坑平断面実測図（1／20）…14
第14図　焼土坑出土遺物実測図（1／3）…15
第15図　2号埋甕平断面実測図（1／20）…15
第16図　2号埋甕出土遺物実測図
（1／3、●は1／6）……15
第17図　3号溝出土瓦実測図（1／3）……16
第18図　1～4、6、7、9、10、12号土坑平断面実測図
（1／40）……18
第19図　2～4号土坑出土遺物実測図
（1／3）……19
第20図　6・7・12号土坑出土遺物実測図
（1／3）……20
第21図　1・2号ピット出土遺物実測図
（1／3）……20
第22図　鉄滓・石磨実測図（1／2）……21
第23図　大門遺跡（大門484－1、2）調査区
位置図（1／200）……23
第24図　怡土城土塁表採徳利実測図
（1／3）……24

図版目次

巻頭図版1　末永数蔵町遺跡全景（南西から）
巻頭図版2－1　末永数蔵町遺跡全景（真上から）
巻頭図版2－2　宇治神社　絵馬
図版1－1　北側調査区全体写真（真上から）
図版1－2　南側調査区全体写真（真上から）
図版2－1　石垣出土状況（北東から）
図版2－2　石垣出土状況（東から）
図版2－3　焼土坑検出状況①（東から）
図版3－1　焼土坑出土状況②（東から）
図版3－2　焼土坑半掘状況（東から）
図版3－3　焼土坑完掘状況（東から）
図版4－1　焼土坑床面検出状況（東から）
図版4－2　1号埋甕出土状況　遠景（北から）
図版4－3　1号埋甕出土状況　近景（北から）
図版4－4　2号埋甕出土状況（北から）
図版4－5　5号土坑遺物出土状況（東から）
図版4－6　土鈴出土状況（西から）
図版4－7　北側調査区　東壁土層状況(西から)
図版4－8　南側調査区　東壁土層状況(西から)
図版5　出土遺物①
図版6　出土遺物②
図版7　出土遺物③
図版8　出土遺物④

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成18年7月6日付けで、福岡県前原土木事務所から前原市大字末永字数蔵町地内の道路拡幅工事2,027㎡に関して埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第94条第1項）が前原市教育委員会（文化課）に提出された。

対象地は、川原川の右岸地域にあたり、末永古屋敷遺跡や末永高木遺跡、高祖大鷲遺跡など弥生時代～中世にかけての重要遺跡が発見されており、周知の埋蔵文化財包蔵地内であったため、事業対象区の確認調査が必要な旨を回答した。

確認調査の結果、北から約20mの地点で、南北幅約180mの深い谷が入る旧地形を呈し、僅かに引っ掛かった北側台地上に近世～現代の遺構が確認された。このことにより、調査対象面積は開発面積2,027㎡のうち553㎡となった。

この確認結果を受けて、福岡県前原土木事務所と本調査の工程協議・調整が行われ、6月には調査委託に関して合意が得られたため、A地区（228㎡）、B地区（325㎡）合計553㎡の記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

2．調査の組織

平成18、19年度にかけて実施した末永数蔵町遺跡の調査組織は以下の通りである。

発掘調査及び整理・報告書作成業務（平成18、19年度）

調査主体　前原市教育委員会

			平成18年度（調査）	平成19年度（報告書作成）
総括	教育長		菊竹利嗣	中原一憲
	教育部長		三嶋俊蔵（～平成18年9月）	坂巻喜直
			坂巻善直（平成18年10月～）	
	文化課長		鬼木武信（～平成18年12月）	久保静代
			久保静代（平成19年1月～）	
	文化課長補佐			
	兼文化振興係長		久保静代（～平成18年12月）	
	文化課文化財係長		角　浩行	角　浩行
	（平成19年4月から発掘調査係へ名称の変更）			
庶務	同	主事	大久保二葉	矢野真司
調査	同	主事	江崎靖隆	江崎靖隆
			福田博右（臨時職員）	

本調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々のほかに多くの方々からの御助言、御支援をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

（現場作業員）

溝口英太郎、生出弘毅、吉村政続、北海京子、神谷三枝子、藤木和子、中田朋子、末松繁光、福井菊雄、瀬知昌夫、江口富美子、江藤晴美、島秀子、川内真智子、宮下ヤス子、山崎チヨ子、平山富士子、井上狄衣、平野隆之

（整理作業員）

末益真奈美、友池真由美、藤森啓子、和多治子、柏田瞬子、田中裕美、名取さつき、加藤優香、藤野さゆり、三島弘美、田中阿早緑、波多江聡美、有田麻里江

3．調査の工程

末永数蔵町遺跡の調査は平成18年7月12日～平成18年9月15日まで実施した。以下、調査日誌から抜粋して調査経過を記す。

平成18年

7月12日（水）　重機搬入　表土剥ぎを行う。

7月13日（木）　南側調査区　重機搬入。

7月19日（水）　石垣状遺構を検出。写真撮影を行う。

7月21日（金）　石垣状遺構実測終了。

7月26日（水）　布掘り基礎建物検出。半掘終了。

8月3日（木）　1号掘立柱建物検出。写真撮影。

8月7日（月）　1／20全体実測図作成のための割付を行う。

8月11日（金）　布掘り基礎建物完掘状況写真撮影。平断面図作成。

8月16日（水）　焼土坑を検出。トレンチを設定し調査を行う。

8月22日（火）　平板で地形コンタを入れる。

8月29日（火）　1／20実測終了。

9月8日（金）　遺跡全体の空中写真撮影を行う。

9月15日（金）　現場重機による埋め戻し、機材撤収、調査完了。

Ⅱ．位置と環境

末永数蔵町遺跡は前原市大字末永字数蔵町に位置し、川原川の右岸、標高46～47ｍを測る丘陵上にあたる。川原川は井原山系（標高983ｍ）に源を発し、北流する瑠梅寺川の支流であり、この沖積作用によって徐々に平野を形成したものである。瑠梅寺川は、中小の河川と合流しながら、東に向きを変え、今津湾へと注いでいる。

本遺跡が位置する怡土郡東部は、古代「伊都国」の王都である三雲・井原遺跡を含み、これに関する重要な遺跡が集中する地域である。福岡藩の学者貝原益軒が編纂した「筑前続風土記」には、怡土郡について「田地広く、山川美にして、古跡が多い」と記され、歴史の宝庫であることが分かる。三雲・井原遺跡は現在でも遺跡の範囲確認調査が継続して行われ、三雲南小路王墓や井原鑓溝王墓、平原王墓など歴代の伊都国王の存在、下西地区の方形環濠、八龍地区の三重環濠など徐々にではあるが、王都の姿が明らかになってきている。また、古墳時代の代表的な遺跡として、端山古墳、築山古墳がある。両墳とも前方後円墳であるが、端山古墳は全長78.5ｍ、後円部径42ｍ。築山古墳が全長約60ｍ、後円部径48ｍでいずれも盾形の周溝をもち、怡土平野を治める首長墓と考えられている。

次に川原川の右岸地域遺跡を概観すると、弥生時代の集落は汐井川右岸および川原川右岸に認められ、末永六ノ坪遺跡、末永初田遺跡、高祖榎町遺跡、高祖大鷺遺跡などがある。末永六ノ坪遺跡では、試掘調査により甕棺墓4基を確認し、包含層より小形仿製鏡片が出土している。末永初田遺跡では、弥生時代中期の遺物包含層、ピット、土坑を検出しており、県道大野城・二丈線以南にも弥生時代の遺跡が展開していることが明らかになっている。高祖榎町遺跡では弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓8基が検出されている。高祖大鷺遺跡では、住居跡2棟、木棺墓3基を検出している。墳墓群が中心であり、弥生時代前期末～中期前半にかけて川沿いに点在している。

古墳時代では高祖山（標高416ｍ）西裾に古墳群が築かれる。高祖東谷1号墳は怡土城郭内の標高75ｍほどの尾根筋にあり、古墳時代前期に属する全長36ｍの前方後円墳である。墳丘に葺石を配し、後円部頂部から箱式石棺と箱式木棺が出土している。両方とも棺内は盗掘を受けていたが、箱式木棺の埋土中から鉄剣が2本分出土している。末永高木遺跡では古墳1基を確認している。古墳は調査区の北端にあり、直径約20ｍの周溝が検出されているが、主体部は調査区外であったため、不明である。周溝内には石囲い状の集石があり、その中から土師器の高杯7個体分が出土し、周溝内祭祀が行われている。これらの土器から、5世紀中ごろに比定されている。高祖大鷺遺跡では、古墳を3基確認している。古墳は3基とも6世紀代の円墳で、横穴式石室の遺存が極めて悪く、副葬品は1号墳で耳環が出土している。この他にも、山犬尾古墳群、高祖東谷古墳群、高祖屋敷古墳群、高祖神社東古墳、楓古墳群など古墳時代後期の群集墳が数多く見られる。

奈良時代に入ると、高祖山西斜面に怡土城が築城される。「続日本紀」によると、天平勝宝8年（756）～神護景雲2年（768）までの約12年間を費やして築城され、当初は吉備真備が担当するが、途中で佐伯今ド人に交代し完成している。約2ｋｍにわたる土塁や礎楼跡、倉庫が確認されている程度であり、実態の解明には基礎調査が必要である。同時期の遺跡には末永高木遺跡がある。包含層から「伊刀郡託」と線刻された須恵器の大甕片や底部に「前田」と墨書された土器を検出しており、周辺に駅家もしくは駅家相当施設があると考えられる。

中世になると、原田氏が廃城となっていた怡土城を再利用して高祖城を築城する。築城時期に関しては、建長元年（1249）に原田種次が築城したと伝えられているが、裏付ける文献資料がなく、不明な点が多い。城の縄張りとしては「上ノ城」・「下ノ城」を中心に郭群を形成し、上ノ城の発掘調査によって、虎口（城門）、石垣、礎石等を確認している。末永地区にも中世の集落があり、末永古屋敷遺跡では、包含層より宋銭や硯、陶磁器などが出土し、中世から近世まで続く集落が確認されている。

このように、川原川右岸においても弥生時代から近世までの遺跡が確認され、県道大野城・二丈線のルート（日向峠・深江ルート）が原始・古代の重要な交通道路である可能性が指摘されており、古代、中世には交通の要衝として重要な地域と考えられる。

【参考文献】

角　浩行編　1995『川原川右岸地区遺跡群Ⅰ』前原市文化財調査報告書第57集

角　浩行編　1998『川原川右岸地区遺跡群Ⅱ』前原市文化財調査報告書第65集

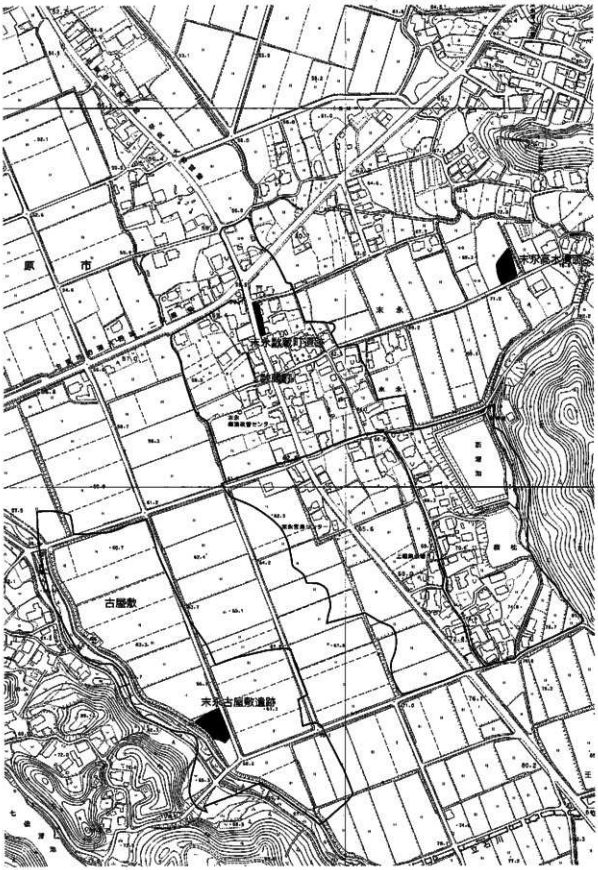
瓜生秀文・山口裕平編　2003『高祖城』前原市文化財調査報告書第85集

瓜生秀文編　2006『国指定史跡　怡土城跡』前原市文化財調査報告書第94集

岡部裕俊編　1991『井原遺跡群』前原市文化財調査報告書第35集

1.末永鼓町遺跡　2.末永古屋敷遺跡　3.末永高木遺跡　4.西ノ堂古賀舟古墳　5.平原遺跡　6.三雲・井原遺跡群　7.怡土城跡　8.今宿五郎江遺跡　9.治大塚古墳　10.御道具山古墳　11.志登支石墓群　12.潤地頭給遺跡　13.浦志遺跡　14.雨原西町遺跡　15.上櫻子遺跡　16.釜塚古墳　17.一貴山銚子塚古墳　18.曲り田遺跡

第1図　周辺遺跡分布図（1/75,000）



第２図　末永飯蔵町遺跡周辺地形図（1/5,000）

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

（1）調査の概要

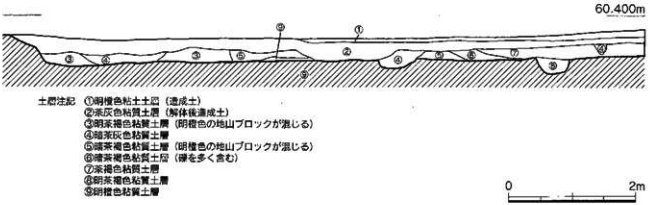
末永数蔵町遺跡は県道早良・大野城線の道路拡幅工事に伴って行われた発掘調査で、末永の交差点から南に約16mの位置である。事前の試掘調査を実施したところ、拡幅工事対象全長214mのうち北から約20mまで台地があり、南側は南北幅約181mの深い谷が入っていることが明らかになった。この結果を踏まえ、検出された北側台地（553㎡）のみを調査対象とし、南側谷部については調査対象から除外した。対象地は住宅の日の前ということもあり、出入りを確保するため、調査対象地の中央を通路状に残し、調査区を分けて（A地区、B地区）調査を行うこととした。

検出された遺構は江戸時代～明治にかけての石垣状遺構1列、掘立柱建物３棟、布掘り基礎建物1棟、埋甕２基、焼土坑1基、土坑12基、ピット20基を検出した。検出した集落が『筑前続風土記』の末永村移動に関する記載と時期的に符合し、江戸時代以降の末永村の様子を考える上で重要な資料となった。

（2）基本層序

基本層序は、調査区東壁に設定した土層断面図で示す。遺構面は現地表面から約35cmで検出した。旧地形は北に向かって僅かに下がり、その上に近現代の遺物包含層（3、5～7、9層）がのる。遺物包含層から切り込む4層は、住宅の基礎にあたる。また、遺物包含層は以前述べていた住宅を解体する際に大きく削平を受けている。この削平は大きく、ドの遺構面にバケットの爪跡を残している。1、2層は住宅解体後の造成土にあたり、上面は水平を成している。

南側谷部は、最下層で洪水による黄褐色砂礫層が見られ、グライ化した青灰色シルト層により大きく埋まっている。川原川の流路が変わったのであろう。その後、暗灰色粘質土層、礫を多く含む暗茶色粘質土層が入り、この層が近・現代の遺構面となっている。



第３図　東壁土層断面実測図（1/60）

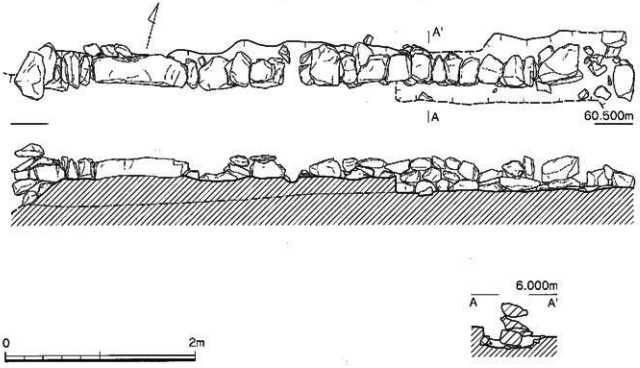
2．遺構と遺物

(1) 石垣状遺構

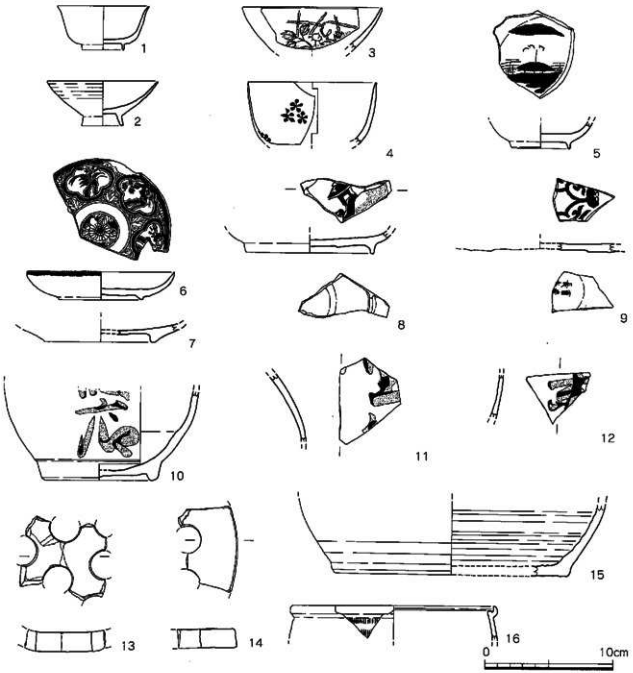
調査区ほぼ中央で検出した石垣状遺構で、石垣の南側前面が、現在の隣地との境界線と一致する。東西長6.66mまで残存しており、県道まで延びていたかどうかは不明で、通路確保のため、一部未掘である。根石は横長の石材を用い、その上に人頭大の石を2～3段積み上げるが、若干乱雑で、裏込め石も少ない。

出土遺物

1～12は磁器である。1は端反碗で、口径7.1cm、器高3.5cm、底径3.2cmを測る。外面には回転ナデ調整が明瞭に残る。2は小坏である。口径6.6cm、器高3.5cm、底径3.5cmを測る。3は呉須の発色の良い碗で竹、桃を描く。明治以降。4は半球形碗で、花文を3つ1セットで描く。高台を欠損する。5は山水文を描く碗で、底径4.5cm。6は口縁端部に口紅を施す皿で、菊、松、水仙のような植物を描く。口径11.5cm、器高2.2cm、底径6.5cmを測る。7は底部のみ残存する皿で、底径8.3cm。8も高台のみ残す皿で、内面に山水文を描く。9は内面に花文、外面底部に「富貴長春」の文字が見られる。1690～1780年。10～12は船形徳利いわゆる貧乏徳利である。同一のものと考えられるが接合しない。10は胴下位のみ残存する。外面には「□店」「弓」まで確認できる。11は「銘？□」12は「万？」であろうか。13,14は土師質の七厘のサナである。中心の孔から同心円列に円孔を配置する。下面にコゲ、灰が付着する。15は陶器の甕で、底部のみの残存である。緑黄色の釉が外面に掛かる。16は行平鍋で、鉄釉を施す。上野・高取系で19世紀。



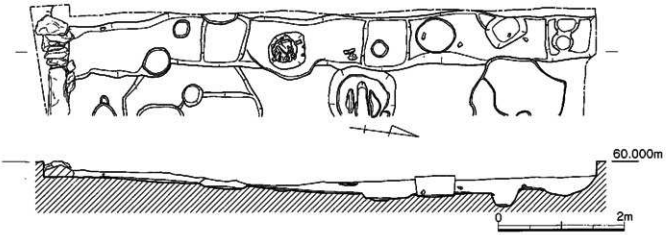
第4図　石垣状遺構平断面実測図 (1/40)



第5図　石塁状遺構出土遺物実測図（1/3）

（2）布掘り基礎建物

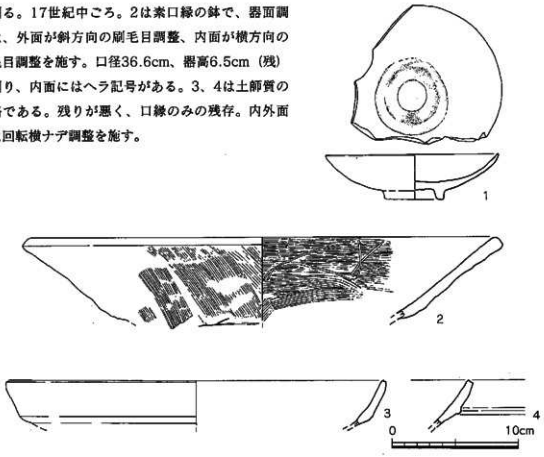
南側調査区西端で検出した布掘り基礎建物で、一辺のみ検出した。南側調査区外へ延びており、東西長8.2＋αm、南北幅0.84m、深さ21cmを測る。布堀り内にはやや長方形状の掘り方が3基確認され、規模は1.85m×2.1m、深さは1～3cm程度である。1号柱穴及び2号柱穴は柱痕跡が確認できたが、3号柱穴については確認することができなかった。東側には対応する柱穴が存在しないことから、県道下に広がっていると考えられる。布掘り内には鉄滓や砥石が検出されている。



第6図　布掘り基礎建物平断面実測図（1/60）

出土遺物

1は肥前の青磁皿である。高台無釉で、見込みに蛇の目釉剥ぎを行っている。口径13.5cm、器高3.6cmを測る。17世紀中ごろ。2は素口縁の鉢で、器面調整は、外面が斜方向の刷毛目調整、内面が横方向の刷毛目調整を施す。口径36.6cm、器高6.5cm（残）を測り、内面にはヘラ記号がある。3、4は土師質の焙烙である。残りが悪く、口縁のみの残存。内外面には回転横ナデ調整を施す。



第7図　布掘り基礎建物出土遺物実測図（1/3）

（3）掘立柱建物と関連施設

1号掘立柱建物

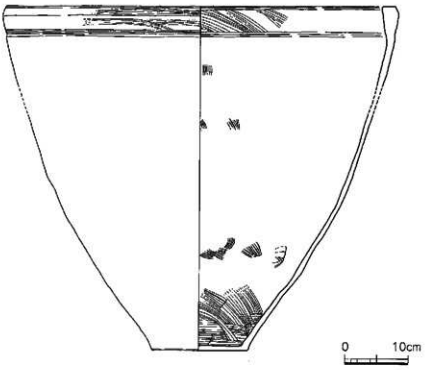
北側調査区西端で検出した1間×1間の掘立柱建物で、建物内には便槽と考えられる埋甕がある。梁行は西側で2.74m、東側で2.76m、棟行は北側で2.15m、南側で2.14mを測る。柱穴の深さは浅く、5cm程度である。計画方位はN－52°－Wである。柱穴からの出土遺物は無い。埋甕の北東側ピットからは上鈴が出土している。

1号埋甕

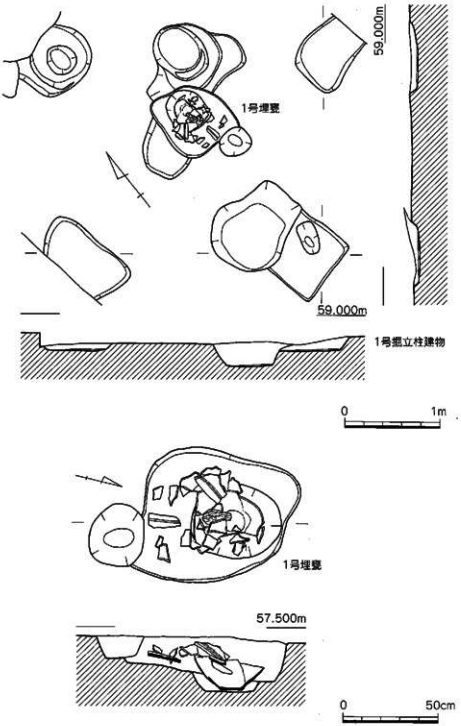
1号掘立柱建物内の東側よりに遺られた埋甕で、便槽と考えられる。長さ約1.5m、幅約1.43mの不正円の上坑に円形の上坑をもう1段掘り込む。甕は垂直に置かれ、胴上部は住宅の解体の際に大きく破壊されている。

出土遺物

1は便槽に使用された瓦質の甕で、復元口径61.8cm、器高55.6cm、底径15.2cmを測る。器面調整は外面がナデ、内面は口縁が斜方向の刷毛目、胴部がタタキの後ナデ、底部が横方向の刷毛目の後ナデを施す。



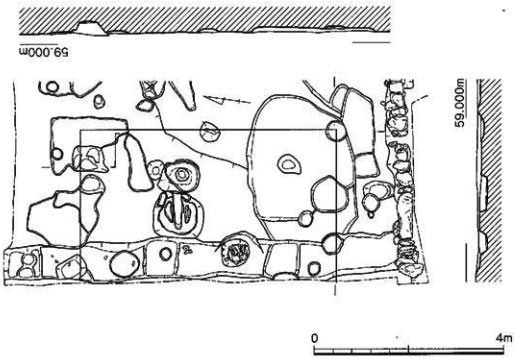
第8図　1号埋甕実測図（1/6）



第9図　1号掘立柱建物・1号埋甕平断面実測図（1/40・1/20）

2号掘立柱建物

南側調査区西端で検出した東西棟建物で、建物の一部は調査区外に延びるため、2間×1間まで確認した。柱穴は布掘り基礎建物に切られる。梁行は5.21m、棟行は北側で2.5＋αm、南側で3.14mを測る。1号及び2号柱穴が直角軸線から外れており、全体的に北側が歪む。柱穴からの出土遺物は見られなかった。



第10図　2号掘立柱建物平断面実測図（1/80）

3号掘立柱建物

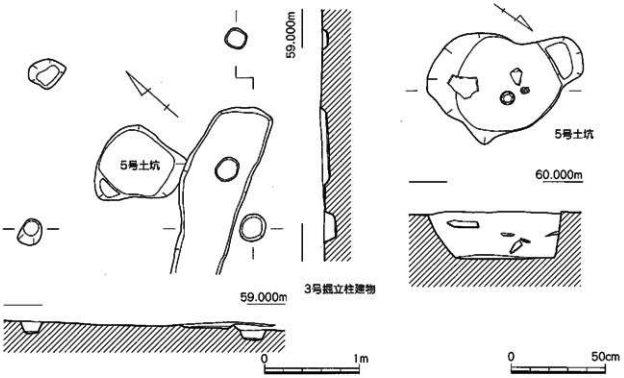
南側調査区中央付近で検出された1間×1間掘立柱建物で、1号柱穴が直角軸線から外れている。梁行は西側で2.34m、東側で2.11m、棟行は北側で1.65m、南側で2.01mを測る。深さは10～12cm程度と浅い。建物内には5号土坑がほぼ中央にある。

5号土坑

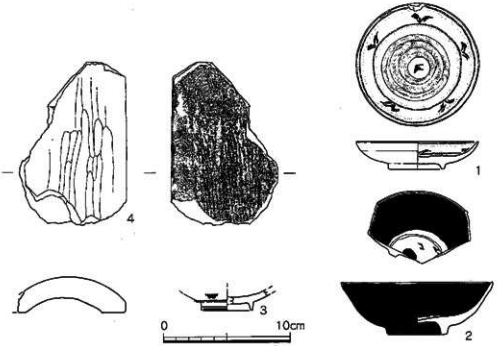
3号掘立柱建物内の中央に位置する土坑である。平面形は不正形を呈し、西側に1段のテラスを設ける。規模は長さ0.82cm、幅5.9cm、深さ25cmを測る。土坑内からは、陶器、磁器、瓦等が出土しているが、床面からは浮いていた状態である。

出土遺物

1は完形の小皿で、平戸・川三内系か。見込みに蛇の目釉剥ぎを行っている。口径9.6cm、器高2.2cm、定径4.5cmを測る。1650～1690年。2は陶器の丸形碗で、1／3程度の残存である。内外面鉄釉を施し、見込みに蛇の目釉剥ぎを行う。3は磁器の半球形碗で、高台のみの残存である。高台径4.0cm、器高1.3cmを測る。4は丸瓦で1／2程度の残存である。残存で長さ12.5cm、幅8.4cm、厚さ1.6cmで、凸面調整は外面ヘラ削り、内面布目痕の後ヘラ削りを施す。



第11図　3号掘立柱建物、5号土坑平断面実測図（1/40、1/20）

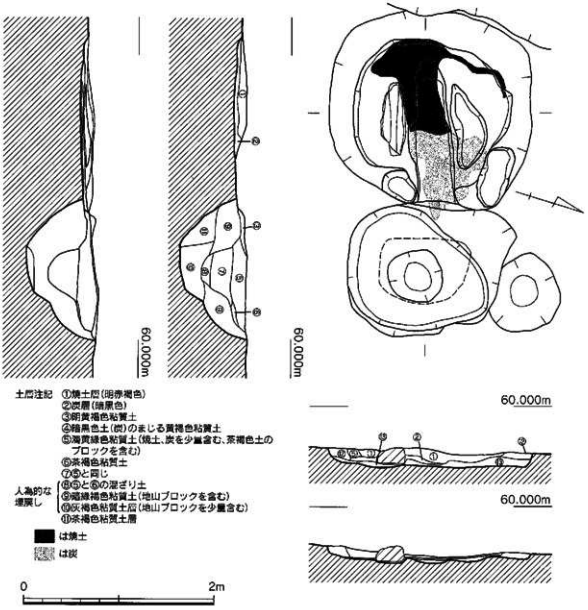


第12図　5号土坑出土遺物実測図（1/3）

(4) 焼土坑

焼土坑

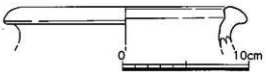
2号掘立柱建物内のやや北寄りに位置する。平面形が不正円を呈し、規模が東西長1.07m、南北長1.05m、深さは約10cm程度である。カマドと考えられるが、布掘り基礎建物の埋土より鉄滓や砥石が検出されており、炉の可能性もある。袖は円形に巡り、東側が開口する。中に袖石を2石配しているが、北側の袖石は抜き取られている。赤色硬化面は袖石中央から西の煙出部に至り、南側支石の内面は被熱している。逆に炭は袖石から東側に広がっている。土層観察の結果、円形に掘削した後、袖石や袖石間が窪むように床面を成形し(13層)、袖を構築している。(12層) 焼土坑の西側には楕円形状の土坑がある。規模は長さ73cm、幅62cm、深さ24cmを測る。土層の5～8層は焼土や炭を少量含んでおり、元々柱穴であったのを人為的に埋め戻し、灰原用に掘削したものであろう。



第13図　焼土坑平断面実測図 (1/20)

出土遺物

1は陶器の甕で、口縁部のみの残存である。口径16.2cm(復元)、器高3.2cm(残存)を測る。内外面鉄釉を施す。



第14図　焼土坑出土遺物実測図（1/3）

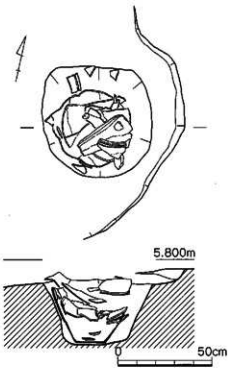
（5）埋甕

2号埋甕

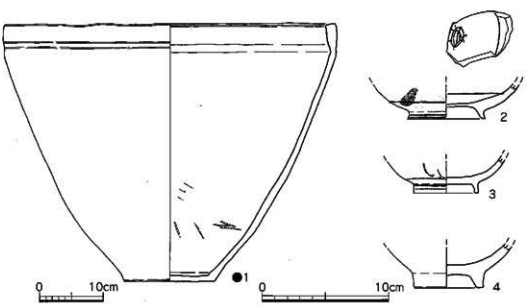
南側調査区西端で検出し、布掘り基礎建物を切る埋甕である。平面形は円形で、長さ57cm、幅58cm、深さ34cmを測る。甕は垂直に埋められており、便槽と考えられる。

出土遺物

1は便槽に使用された甕で、口縁部～胴上位にかけて2／3程度欠損している。素口縁は若干内傾しており、口縁下に2重の沈線が入る。口径52.7cm(復元)、器高41.2cm、底径14.5cmを測る。器面調整は外面がナデ調整、内面が板状工具によるナデの後ナデ調整を施す。2～4は磁器。2は碗で、胴下位～高台まで残存する。内面に描かれているのは建物であろうか。高台径5.8cmを測る。3は丸形碗で、外面に圏線を描く。高台径4.7cm器高2.8cm（残存）を測る。4も丸形碗で、高台径5.5cm、器高3.2cm（残存）を測る。



第15図　2号埋甕平断面実測図（1/20）



第16図　2号埋甕出土遺物実測図（1/3、●は1/6）

（6）溝

1、2号溝

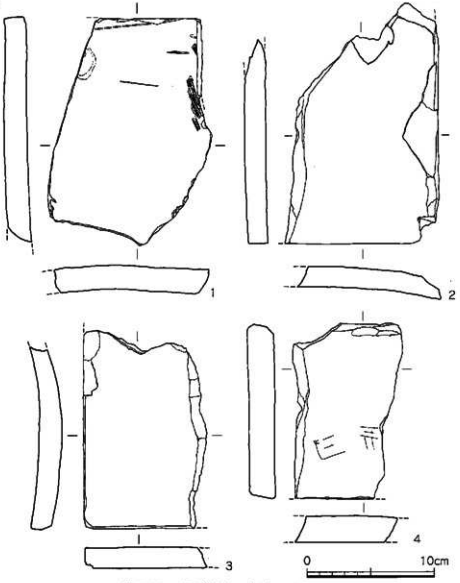
1、2号溝は共に同一遺構で、北側調査区に平行に巡る排水溝で、3号溝を切る。溝自体は調査区外に延びるが、南側調査区まで及んでいない。出土遺物は細片ばかりで、図示に耐えないものばかりであった。

3号溝

1、2号に直行する形で検出された溝で、近現代の井戸を切っている。溝には補強のためであろうか瓦を溝の両壁に配置している。

出土遺物

1～4は3号溝から出土した平瓦で、溝の形状に合わせて配されていたものである。1は1／2程度の残存で、長さ18.4cm、幅11.5cm、厚さ2.1cmを測る。焼成は良好。2は残存で長さ19.0cm、幅11.1cm、厚さ1.6cmを測る。3は残存で長さ15.6cm、幅8.9cm、厚さ1.8cmを測る。ナデ調整で綾處に仕上げる。4は1／3程度の残存で、残存で長さ13.9cm、幅8.6cm、厚さ2.1cmを測る。色調は青灰色で、焼成は良好。



第17図　3号溝出土瓦実測図（1/3）

（7）土坑

土坑は後世の排水溝、掘削などにより残存が悪い。中には柱穴と考えられる土坑もあるが、対応する柱穴が検出できなかったものについては、土坑として報告している。なお、5号土坑は3号掘立柱建物に付随する遺構であるので、ここでは取り扱わない。

1号土坑

北側調査区西端で検出した土坑で、一部調査区外に延びる。規模は長さ0.96m、幅0.47＋αm、深さ8cmの浅い土坑である。

2号土坑

北側調査区南東側に位置する楕円形状の土坑で、2号溝に切られるため、規模が不明な部分があるが、現状で長さ1.82＋αm、幅1.45m、深さ35cmである。西側には柱穴と考えられる方形状の土坑がある。土坑内より陶器が数点出土している。

3号土坑

北側調査区東側で検出された土坑で、北側に1段テラスを設けている。排水溝に切られているが、現状では長さ1.45m、幅1.15＋αm、深さ75cmを測る。土坑内から磁器、陶器が多く出土したが、図示しえたものは少ない。

4号土坑

平面形が円形を呈する土坑で、北側調査区東端に位置する。長さ0.67m、幅0.78m、深さ0.64mを測る。柱穴と思われたが、対応する遺構が存在しない。土坑内から磁器、陶器が数点出土している。

6号土坑

楕円形を呈し、5号土坑と隣接する。柱穴は２つあり、西側柱穴で長さ0.22m、幅0.25m、深さ10cm、東側柱穴で長さ0.35m、幅0.40m、深さ17cmを測る。磁器が僅かに出土した。

7号土坑

南側調査区の西端に位置する土坑で、北西側に1段テラスを設け、東側に柱穴が存在する。長さ1.76m、幅1.4m、深さ6cm程度である。磁器が数点出土している。

9号土坑

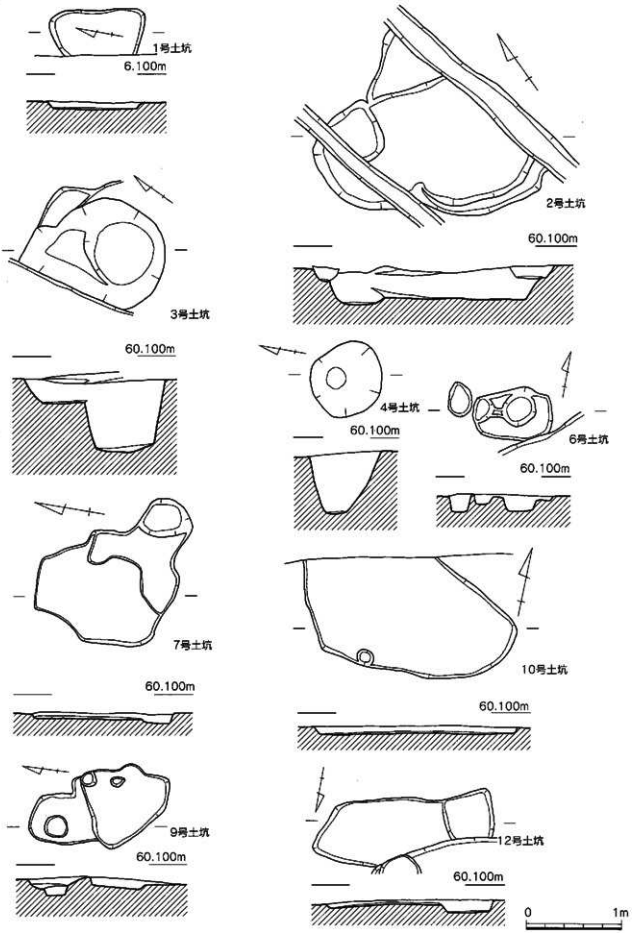
5号土坑に隣接するで、南側の土坑に切られる。土坑内には柱穴が存在し、規模は土坑が長さ0.54m、幅0.65＋αm、深さ18cm、柱穴は直径24cmの円状を呈する。

10号土坑

南側調査区北東端で検出された、不整形の土坑である。一部調査区外に延びているため、不明な部分があるが、規模は長さ2.1m、幅1.21＋αm、深さ6cmを測る。住宅の解体の際に掘削されたものである。

12号土坑

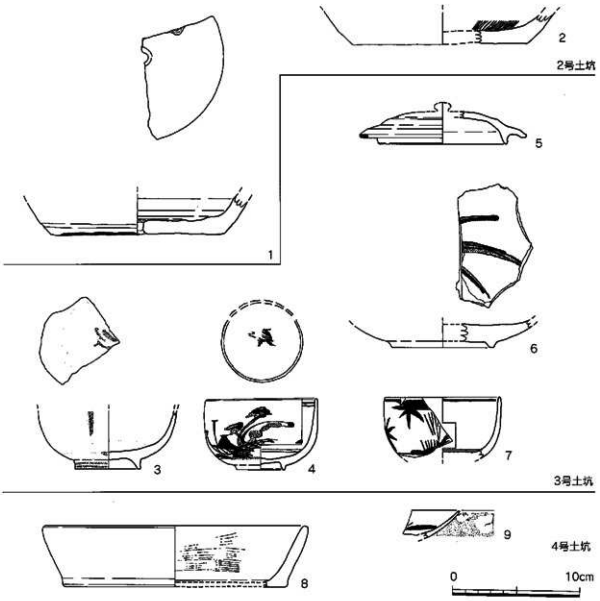
石垣状遺構の北側に隣接する土坑で、平面形が不整形である。西側に方形状の土坑があり、土坑の規模は長さ1.75m、幅0.72m、深さ4cmを測る。土坑内から磁器、陶器が僅かに出土している。



第18図　1～4、6、7、9、10、12号土坑平断面実測図（1/40）

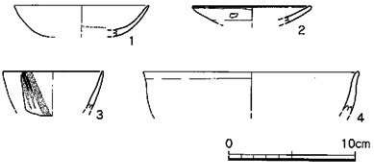
出土遺物

1、2が2号土坑、3～7が3号土坑、8、9が4号土坑からの出土である。1は陶器の底部片で、底径14.2cmを測る。底部中央には焼成後穿孔が見られ、釉薬は施されていない。2は擂鉢で、底部片である。底径16.5cm、器高2.6cm(残存)を測る。3は半球形碗で、口縁部を欠損している。高台外面には圏線、内面には不明文様が描かれている。4も半球形碗である。口径8.5cm、器高5.6cm、高台径3.8cmを測る。外面には松、山、海、内面は圏線と不明記号を描く。5は土瓶の蓋で、受部径13.0cm、器高2.5cm(残存)を測る。受部端に鉄釉が僅かに付着する。6は1／3程度残存する皿である。内面には草文を施す。7は半球形碗で、高台部分を失っている。外面に竹、内面には圏線を描く。8は土師質の焙烙で、復元で口径20.0cm、器高4.8cm、底部径17.3cmを測る。外面にはススが付着し、内面の器面調整は横方向の刷毛目を施す。9は皿の口縁部片で、外面に藁灰釉を施す。



第19図　2～4号出土遺物実測図 (1/3)

10は6号土坑からの出土で、磁器の小皿である。口径12.6cm、器高2.4cmを測る。内面には圏線を描く。11は7号土坑からの出土。青磁の小皿で、底部を欠損する。釉薬は内面全体～口縁外面まで施す。12、13は12号土坑からの出土。12は磁器の碗である。外面に竹、内面に圏線を描く。口径8cm、器高3.0cmを測る。13は口縁端部が外反する陶器の碗で、口径16.8cm、器高3.2cmを測る。



第20図　6・7・12号出土遺物実測図（1/3）

（8）ピット

ピットはA，B両区にまたがり、20基ほど検出されたが、遺物を検出したものは2基のみである。

1号ピット

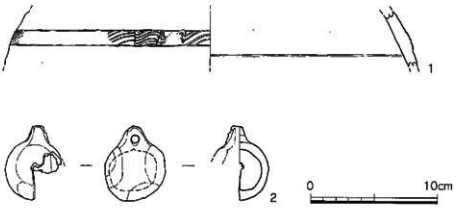
北側調査区南東側に位置するピットで、長さ22cm、幅15cm、深さ10cmを測る。ピット内より陶器が出土しているが、細片ばかりで図示に耐えないものが多い。

2号ピット

1号埋甕に切られるピットで、平面形が楕円形である。規模は長さ47cm、幅36cm、深さ34cmを測る。ピット内上層から土鈴が出土している。

出土遺物

1は1号ピットからの出土。大型甕の胴部片で、波状文を5条1単位で巡らす。器面調整は内外面横ナデを行う。2は2号ピットからの出土。土師質の土鈴で、腹部の一部が破損している。つまみには径6mmの円孔を穿つ。高さ5.9cm、腹部径4.7cmを測る。

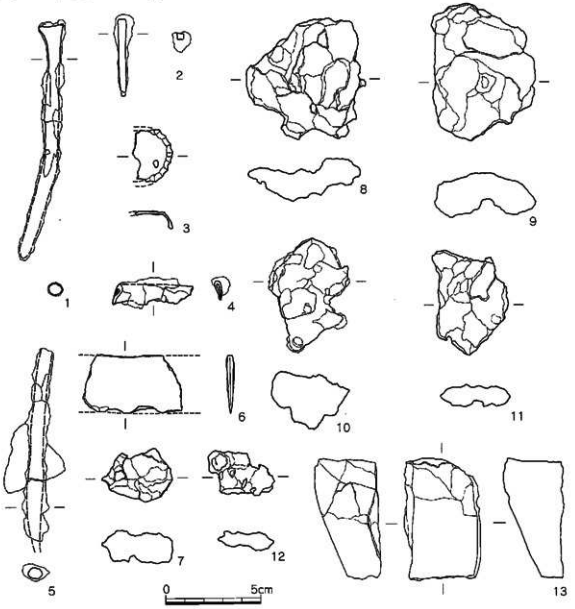


第21図　1・2号ピット出土遺物実測図（1/3）

（9）鉄器と石器

本報告内の各遺構から出土した鉄器・石器をまとめて報告する。

1～4は石垣埋土からの出土。1は釘で、先端に向かって曲がっている。長さ12.7cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm、重量20.53ｇを測る。2も釘で、先端を欠損する。断面形態は四角で、長さ3.9cm、幅0.4cm、厚さ0.3cm、重さ3.73ｇを測る。3はピンの蓋で、1／2程度残存。4は不明鉄器で、鉄板を折り曲げて作成している。長さ4.2cm、幅1.6cm、厚さ1cm、重さ4.55ｇである。5、6は3号土坑からの出土。5は釘で、全体的に曲がっている。長さ10.2cm、幅0.8cm、厚さ0.6cmを測る。6は小刀片で鉄板を折り曲げる。残存で長さ5.1cm、幅3.0cm、厚さ0.4cm、重さ14.84ｇを測る。7は9号土坑から出土した鉄滓である。8～13は布掘り基礎建物からの出土で、8～12は鉄滓である。8、9は椀形滓と考えられる。13は砥石。直方体に近い形状で、砥面は2面ある。長さ6.3cm、幅4.0cm、厚さ3.2cm、重さ118.09ｇ。



第22図　鉄器・石器実測図（1/2）

Ⅳ．まとめ

今回の調査は、主要地方道福岡早良大野城線の道路拡幅工事に伴って行ったものである。工事によって削平される範囲約553㎡に限定したため、遺構の面的な広がりや関係を充分に把握できたとは言い難い。しかし、部分的にいくつかの発見や課題が明らかになってきたので、以下これを整理し総括に代えたい。

1．検出した遺構・遺物について

本調査において検出した遺構は、石垣状遺構、掘立柱建物3棟、布掘り基礎建物1棟、埋甕2基、焼土坑1基、土坑12基、ピット20基で、江戸時代～近代にかけての遺構が中心である。

石垣状遺構は、現在の隣地との境界線と重なっており、出土遺物から明治に入って造られたものである。布掘り基礎建物は1条分のみ検出し、鼎道下に延びていると考えられる。また、5号土坑から瓦が出土しており、本来瓦葺き建物であった可能性がある。出土した陶磁器から17世紀中ごろに比定される。

一方、福岡藩の学者貝原益軒が編纂した『筑前続風土記』には末永村の移動に関する記述がある。それは、慶長の頃（1596～1615年）には井原村内にあったが、その後、分村し古屋敷に部落があった。そして、寛文の末（1672年若しくは1673年）にその古屋敷から、現在の地に移っていることが記されている。村社の宇治神社も元禄十六年（1703年）に現在の地に移転しているようである。古屋敷という小字は数蔵町の南西側にあり、本村の東側に今でも残っており、移転前の末永村はそこにあったのであろう。その調査は、1992年に行われており（末永古屋敷遺跡）、掘立柱建物、溝などから陶磁器が出土していることから、村の一部が調査されたものと見ている。今回の調査は移動した後の末永村を調査したものであり、蔵と考えられる布掘り基礎の建物や、焼土坑、便槽など集落の一部を垣間見ることができた。また、字境が示す古屋敷の範囲と現在における末永集落の範囲が形状において相似しており（第2図）、内部構造を踏襲しながら、移動、発展している可能性があるが、周辺の調査により末永村の集落構造が明らかとなっていくものと思われる。

2．宇治神社の絵馬

今回調査を行った数蔵町という小字は末永村内に7つの蔵が建っていたことに由来するという。宇治神社にはその様子を描いたとする絵馬が残っている。（巻頭図版2－2）福岡県博物館協議会・福岡県立美術館が編集した「福岡県の絵馬－福岡教育事務所管内篇－」には田園図として記録されている。絵馬の構成は、中央に最も大きな茅葺きの建物1棟があり、その周囲に瓦葺の建物（倉庫）が2棟、茅葺きの建物が5棟ある。蔵・小屋の周囲には柵を巡らしている。村の奥には水田と二つの山があり、水田では村人が耕作している姿が描かれている。寸法は96×118cmで、奉納年　嘉永五年（1852年）銘文　縁「奉懇」「嘉永五年　当邑」「壬子六月吉日　中村久吉」と書かれている。幕末に奉納された絵馬で、宇治神社が村社であることから、現在の地に移った末永村の繁栄を願って描かれたものであろう。

3．出土した貧乏徳利について

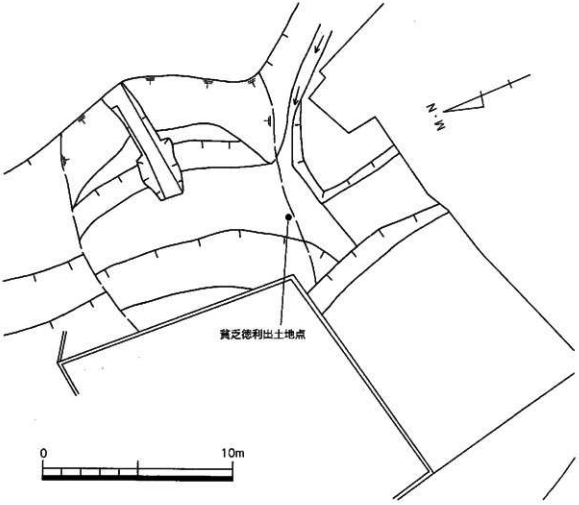
石垣状遺構から出土した貧乏徳利は、残りが悪く、「□店」「号」まで確認できたが、平成18年度に行われた怡土城の土塁調査において、同じ形の貧乏徳利が表採されているので紹介する。出土地点は前原市大字大門484－1、2敷地内で、自然災害により土塁の一部が崩壊したため、土塁修復のための事前調査を行なった際に発見されたもので、調査者は表土に混じって出土したものであるという。出土した貧乏徳利は完形で、口径3.2cm、器高27.8cm、高台径8.6cmを測る。外面には「万屋酒場」「大門菊竹」「銘酒緋桜」「万百二十五号」と書かれている。底部の形状、製作方法は全く同じで、明治に両者は同じ酒造で作られたものと考えられるが、店名が異なるのは酒小売店の違いであろうか。高祖には菊竹姓が数多く存在し、大門の万屋酒場について調べてみたものの、特定することができなかった。今後も調査を続けていきたい。

【参考文献】

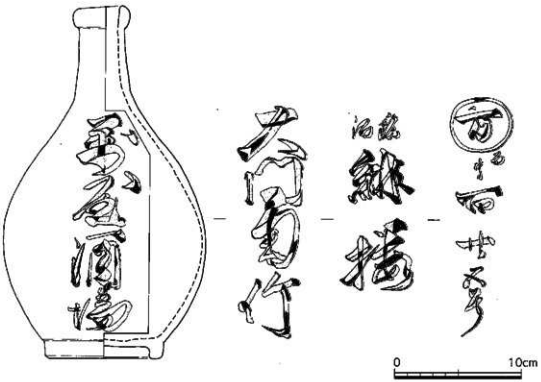
由比章祐１９８９『怡土志摩地理全誌－怡土篇』糸島新聞社

角　浩行１９９５「川原川右岸地区遺跡群Ⅰ」『前原市文化財調査報告書　第57集』前原市教育委員会

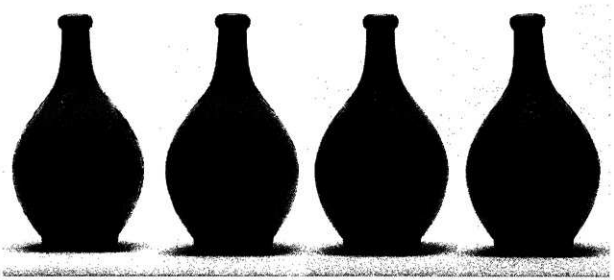
角　浩行１９９６「川原川右岸地区遺跡群Ⅱ」『前原市文化財調査報告書　第58集』前原市教育委員会



第23図　大門遺跡（大門遺跡484-1、2）調査区位置図（1/200）

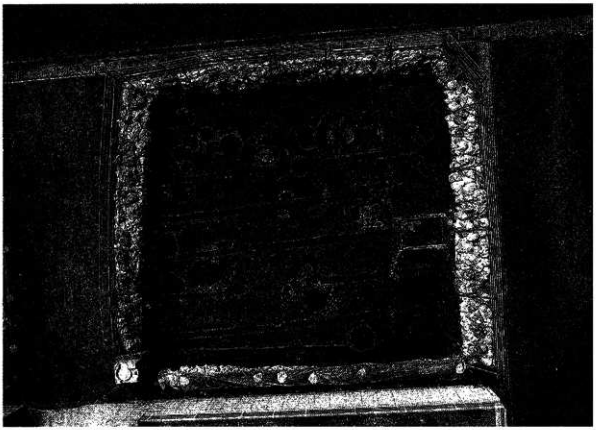


第24図　怡土城土壘表採徳利　実測図（1/3）

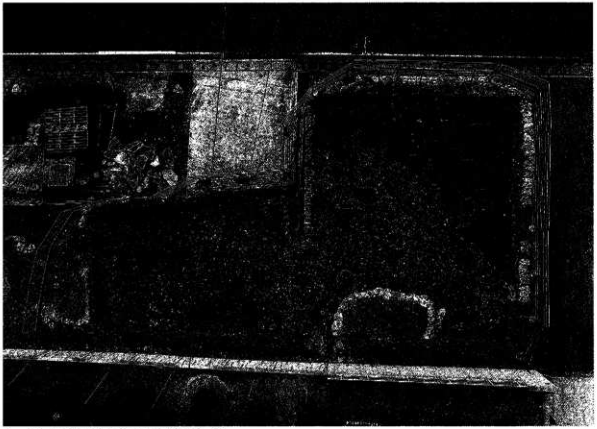


怡土城表採徳利

图　　版



1－1　北側調査区全体写真（真上から）



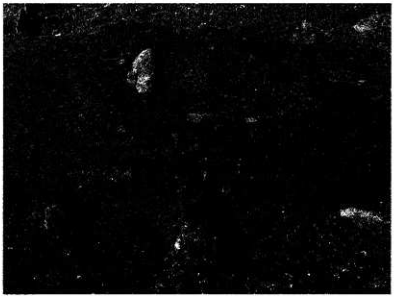
1－2　南側調査区全体写真（真上から）

図版2

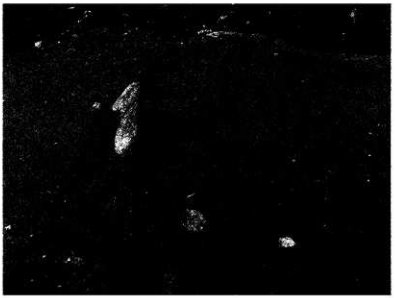
2－1　石垣出土状況（北東から）

2－2　石垣出土状況（東から）

2－3　焼土坑検出状況①（東から）



3－1　焼土坑出土状況②（東から）



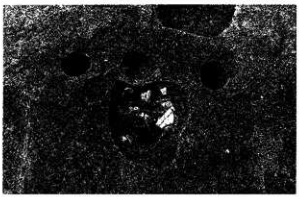
3－2　焼土坑半掘状況（東から）

3－3　焼土坑完掘状況（東から）

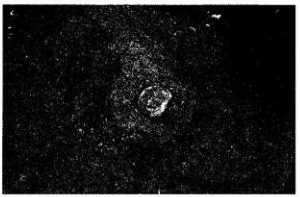
図版4

4－1　焼土坑床面検出状況（東から）

4－5　5号土坑遺物出土状況（東から）



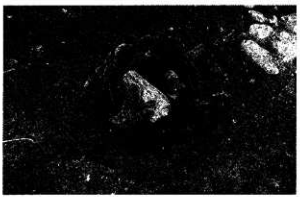
4－2　1号埋甕出土状況遠景（北から）



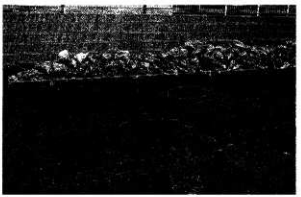
4－6　土鈴出土状況（西から）

4－3　1号埋甕出土状況近景（北から）

4－7　北側調査区東壁土層状況（西から）



4－4　2号埋甕出土状況（北から）



4－8　南側調査区東壁土層状況（西から）

図版5

出土遺物①

図版6

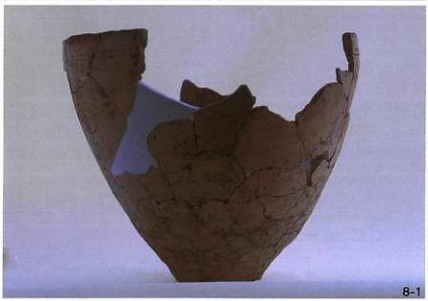
5-16

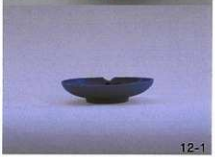
7-1

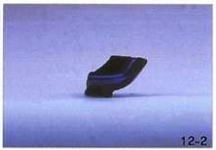
7-2

7-3

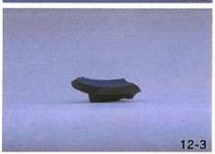
7-4


8-1


12-1


12-2

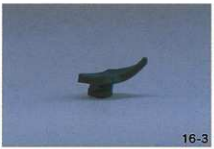
16-1


12-3

12-4

出土遺物②

16-2


16-3

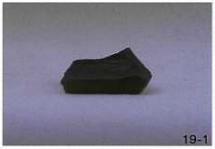
16-4

17-1

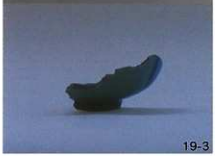
17-2

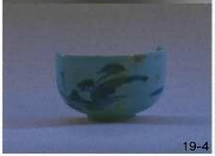
17-3

17-4

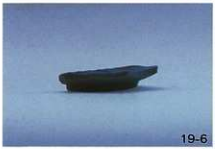

19-1

19-2


19-3


19-4

19-5


19-6

19-7

19-8

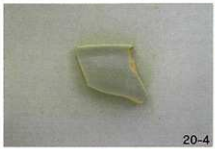
出土遺物③

図版8

19-9

20-1

20-3


20-4

21

22-1

22-2

22-3

22-4

22-5

22-6

22-7

22-8

22-9

22-10

22-11

22-12

22-13

出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	すえながぞうまちいせき
書名	末永数蔵町遺跡
副書名	主要地方道早良・大野城線　道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	前原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第97集
著者名	江崎　靖隆
編集機関	前原市教育委員会
所在地	〒819-1117　福岡県前原市前原西一丁目8番14号
発行年月日	西暦2008年3月31日
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕　伊都国歴史博物館
保管場所所在地	福岡県前原市大字井原916番地

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
末永数蔵町遺跡	福岡県前原市 大字末永	40222		33° 33′ 43″	130° 15′ 49″	2006.7～ 2006.9	553㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
末永数蔵町遺跡	集落	江戸時代～ 明治	掘立柱建物、布掘り基礎建物、 堀跡、焼土坑	陶磁器、鉄器、礎石	

末永数蔵町遺跡

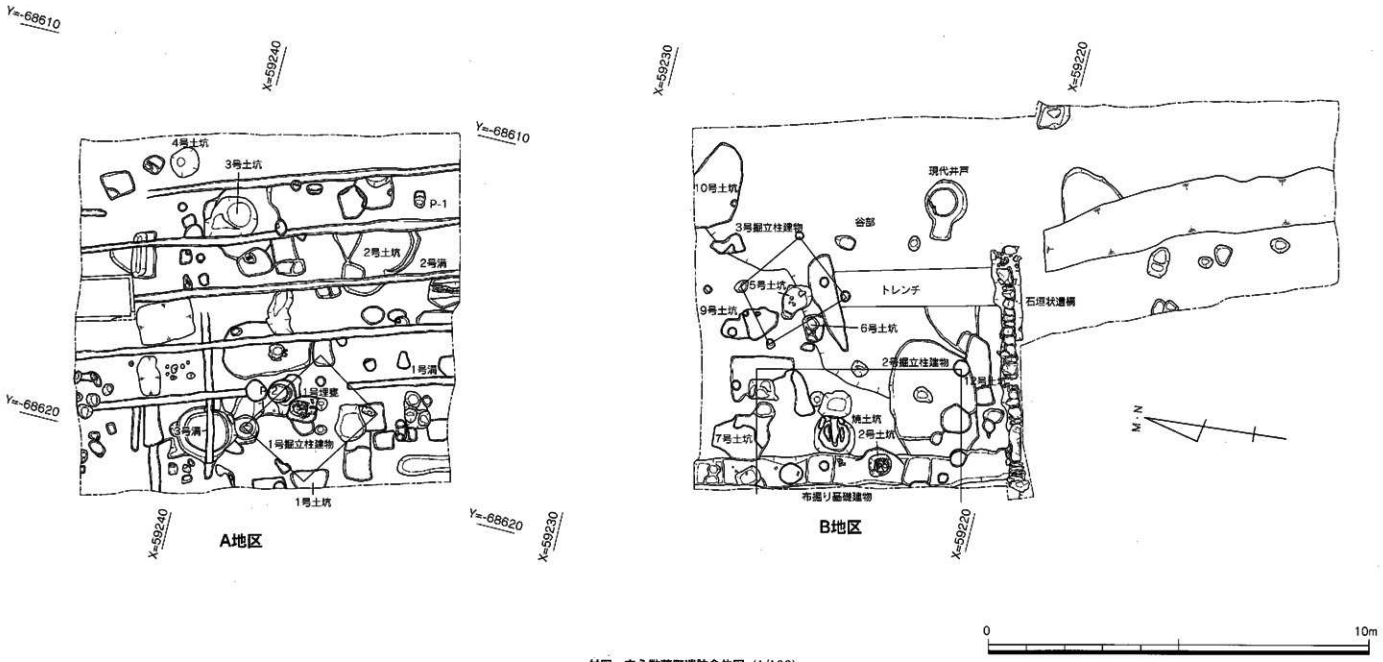
主要地方町福岡早良・大野城線
道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書　第97集

2008年3月31日

発行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL 092-323-1111

印刷　株式会社　重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号
TEL 092-322-0191　FAX 092-324-2661



付図　末永数蔵町遺跡全体図（1/100）